The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	音素の実際 ： 「日本語音声学・音韻論入門」授業におけるレポート課題より
Author(s)	真継, 愛夫; 岩井, 康雄
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2016, 14, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56958
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

音素の実際
—「日本語音声学・音韻論入門」授業におけるレポート課題より —
Reality of Phonemes
— from assignments of the course “Introduction to Japanese phonetics and phonology”

真継 愛夫・岩井 康雄

１．はじめに

本稿における考察は、日本語日本文化研修留学生向けに開講されてきた科目である「日本語音声学・音韻論入門」におけるレポート課題に基づいている。本科目は日本語の音声に関する知識も、音韻論（的分析）に関する知識も持たない学生を対象として、日本語の音声に関する基礎知識を身につけることを目的として開講されている。留学生だけでなく日本人との合同授業であった時期や講義タイトルに「入門」の語があった時期、なかった時期など、形態的な変更は幾つかあるが、同じ目的の下、筆者の一人である岩井が十数年にわたり担当してきた授業である。

授業の大枠はシラバスから示すと下記の通りである。[1)]

本授業では下記のような日本語の音声特徴について学び、日本語の音声にどのような特徴があるかを捉えられるようになる。

- 母音・子音の特徴（母音の無声化、ガ行鼻濁音）
- 五十音図の由来と日本語音の歴史的変化
- 音節とモーラ
- 和語、漢語、外来語、擬音語・擬態語における音韻特徴
- アクセントとその規則
  （外来語アクセント、複合語アクセント規則、東京式アクセントと京阪式アクセント）
- 日本語のリズム（日本語のフット、七五定型のリズム）
- イントネーション

（2015年春学期シラバスより）

２．レポート課題と目的

２．１．レポート課題

当該授業では、15回の授業の中で３回のレポートを課し、出席・授業参加の評価と合わせて、科目の評価（成績）としている。本稿の対象とするレポートは、最初のレポートであり、日本語の子音・母音、音節とモーラなどの説明が終わった後に課したものである。

課題内容と指示は下記の通りである（2015年春学期のレポート課題プリント[2)]）。

第一回　レポート課題　　2015/05/13

締切：　５月25日（月）13：00（時間厳守）

提出方法：　ファイルを添付（attached file）して、下記アドレス宛に送付

*****@cjlc.osaka-u.ac.jp

メールタイトルは「Phonetics 15s Report 1」

形式：・WordファイルまたはpdfファイルでA4用紙2枚以内でまとめる。

・ファイルの冒頭に名前、学生番号、タイトルを記す。

・母語について書くときは、原語での表記の他に、できればIPAで少なくともRoman Alphabetで読みを記す。特殊な文字を使う言語の場合はpdfファイルで送る。

・ファイル名は自分の名前と課題番号（日本語は使わない）とする。

例）*******01.pdf

↑　↑

名前　課題番号

質問等：レポートについて何か聞きたいことがある場合は、メールで質問してください。

直接会って話したい場合は、余裕を持って、アポイントメントを取ること。

【課題内容】

01　あなたの母語の発音について、下の「手順」に従って日本人にインタビューして、その結果について考察しなさい。

［手順］　1．あなたの母語の単語を5つ考えなさい。

注意：地名、人名、ものの名前など、何でもいいですが、日本で**有名ではない**ものを考えてください。

2．あなたがその単語をカタカナで書くとしたら、どう書くか考えなさい。

3．あなたの母語をわからない日本人に、それらの単語を発音して聞かせ、カタカナで書いてもらいなさい。

注意1：日本人は1人でもいいですが、もしできれば、複数の人にインタビューしましょう。

注意2：あなたの発音を聞かせるだけで、**文字を見せてはいけません**。

注意3：たぶん1度では書けないと思います。何回か繰り返し発音したり、少しゆっくり発音しても構いません。

4．「2」で考えたあなたの書き方と日本人の書き方を比べ、その違いを観察し、なぜそのような違いが起こったか考えなさい。

5．レポートには、まず「あなたが考えた単語」「あなたの書き方」「日本人の書き方」を書き、それから考察結果を書くこと。

2．2．目的

「話し手の言語感覚の問題として，形態素と音素の析出には多少の訓練が必要である（後略）」（宮岡（2015 p.104））[3)]。

音声を聞かせてどう聞き取るかという調査は、単に耳の良し悪しを調べるものではない。被験者である日本語母語話者は、「日本語」の条件の下で、調査者の音声を聴き、音声を写すのには不完全なカナ文字で表記する。調査者は自身の表記との比較を通し、自身が母語の音素をどのように捉えているかを改めて考えると同時に、被験者の音声の捉え方を分析することで、「日本語」の条件（音素、音節構造）を学ぶ契機となる。授業のレポートとして、上記のような課

題を課す目的である。

3．レポートの分析

今回分析したのは過去３年にわたり提出された計16人分のレポートである。単語の選定の意図や調査結果にみられた現象、分析の観点は学生により実に様々であるため、今回の分析では複数人が共通して取り上げ、一定の傾向がみられたものを主に取り扱う。

音素に対する気づきは、それぞれの母語と日本語との相違点を通してなされる。その相違点は大きく「学習者の母語になくて日本語にあるもの」と「学習者の母語にあって日本語にないもの」の２つに大別することができる。以下、分類ごとに具体的な現象をとりあげ、学生のレポートを引用しながら分析を進めていくが、その際、レポート内の明らかな誤字、脱字、および単語の間違いは修正した形で引用した。さらに、必要に応じて括弧内にアスタリスクをつけて筆者による補足を加えた（例：引用文（*筆者補足））。また、調査語彙の読みの表記法が統一されていないが、これは各学生の表記をそのまま引用したためである。

3．1．学習者の母語になくて日本語にあるもの

3．1．1．有声音と無声音の対立

中国語、広東語、韓国語などは有声と無声の対立をもたず、有気と無気を対立させる。それらを母語とする学生は日本語の有声音と無声音を、母語の対立構造である無気と有気に対応させる傾向がある。

3．1．1．1．レポートデータ

以下、学生の調査データとレポート内の文章の一部を抜粋してまとめる。

（A）CH15CH01（母語：中国語）の調査データとレポート内の記述

調査語彙「大橋頭」/ [tä　tɕʰiɑu　tʰɤʊ]のカタカナ表記	
CH15CH01	ダー　チャオ　トウ
被験者A1	ター　チャオ　トーウ
被験者A2	ター　チャオ　トウ
被験者A3	タァ　チャオ　トウ
レポート内の記述	
・基本的には中国語の有気音は清音で、無気音は濁音で表した。 ・本実験から日本人は有気・無気音の対立をしていないことが観察された。	

（B）LK12KT02（母語：広東語）の調査データとレポート内の記述

調査語彙「米仔糕」/ [put]3 [tsai]2 [kou]1 のカタカナ表記	
LK12KT02	ブッ　ジャイ　グォー
被験者B1	ブッ　ザイ　コウ
被験者B2	ブッ　ザイ　コウ
調査語彙「周慧敏」[tsɐu　wɐi　mɐn] のカタカナ表記	
LK12KT02	ズァオ　ウェイ　マァン
被験者B1	ツァオ　ワイ　マン
被験者B2	ツァオ　ワイ　マン

レポート内の記述
私は広東語の無気無声音[k]、[kʷ]、[p]を全てカタカナで表記するとき、日本語の有声音[g]、[b]を使った。日本人被験者は二人とも、３番目の広東語単語の最後の漢字「糕」をカタカナで無声子音の「コウ」で表示する。そして、４番目の広東語単語の最初の文字「周」は、私はそれをカタカナで表記すると、有声子音「z」を持つ仮名「ズ」を使った。一方、二人の被験者とも無声子音の「ts」を持つ仮名「ツ」を使った。つまり、私は広東語の無気無声音を日本語の有声音で対応しがちだが、被験者は日本語の有声音で対応したり、無声音で対応したりする。

（C）CH14KR03（母語：韓国語）の調査データとレポート内の記述

調査語彙「볶음밥」/ BOKKUNBAB/POKKUNPAP のカタカナ表記	
CH14KR03	ボックンバッ
被験者C1	ポクンパッ
被験者C2	ポックンパッ
レポート内の記述	
ハングルには「ㅂ」という子音があり、私の場合。これが日本語の「ボ」を発音上似ているのではないかと思ったが、日本人C1・C2両方「ポ」で答えた。韓国語だったら、「ポ」は「ㅍ」（*激音）に近いということが私の見解であるが、よく考えてみると、韓国人の名前をローマ字に移すときもこういう現象が起こりうる現象である。	

３．１．１．２．レポートの分析

（A）、（B）、（C）より、学生が有声・無声と有気・無気を表１のように対応させていることがわかる。

表１ 母語別有声・無声対応表

日本語	学生の母語	
	中国語・広東語	韓国語
有声音	無気音	平音（無気音）
無声音	有気音	激音（有気音）

しかし、日本語母語話者は呼気の量を基準に判断しているわけではなく、この対応表通りの調査結果は得られない。分析を通して学生は有声・無声の対立が有気・無気の対立と重なる訳ではないことに気づく。中国語・広東語・韓国語を母語とする学生にとって、このレポート課題は有声・無声についての音素感覚を磨く効果があるといえよう。

３．１．２．長音

日本語は長短を区別する言語であり、長短によって意味が変わる単語も数多くある。しかし、言語によっては長短の区別が必ずしも意味の区別につながるわけではない。そもそも長短の区別を持たなかったり、ストレスアクセントの一つの現象として長く発音されるなど、その振る舞いは様々である。

3．1．2．1．レポートデータ

以下、学生の調査データとレポート内の文章の一部を抜粋してまとめる。

（D）JS15KR04（母語：韓国語）の調査データとレポート内の記述

調査語彙「경상남도」/ ギョンサンナンド のカタカナ表記	
JS15KR04	ギョンサンナンド
被験者D1	ギョンサンナンドー
被験者D2	ギョンサンナンドゥ
レポート内の記述	
（前略）韓国語では長音という概念がないので、韓国語を聞く時、長音に気づかず、また書く時も長音の記号を使わない。でも、日本人の場合は韓国語の発音を聞く時、自動的にその発音で長音が感じられ、長音の記号「ー」、または「ゥ」を使ってその部分を表している。	

（E）KM13KR05（母語：韓国語）の調査データとレポート内の記述

調査語彙「까마귀」/ kkamagwi のカタカナ表記	
KM13KR05	カマギ
被験者E	カーマーギ
レポート内の記述	
•「까마귀」については、日本語は韓国語に比べ、長音がはっきりと発達していて、長音に間違われた。ここで発音された「까마귀」の場合、正確な発音表記も長音ではないが、韓国語にも長音は存在している。 • しかし、実際の日常生活の中で発音する時は、ほとんどの韓国人は気にしておらず、最近は長音への意識がもっと薄くなっているという。	

（F）IS14KR06（母語：韓国語）の調査データとレポート内の記述

調査語彙「해돋이」/ [hẹdọdʑi]のカタカナ表記	
IS14KR06	ヘドジ
被験者F1	ヘードージ
被験者F2	ヘードージ
レポート内の記述	
聞き取りやすくゆっくり発音したせいで、音節の間に長音を入れる傾向があった。	

（G）AN14RS07（母語：ロシア語）の調査データとレポート内の記述

調査語彙「Ландыш」/ [ɫandɨʂ] のカタカナ表記	
AN14RS07	ラーンディシ
被験者G	ランディシュ
調査語彙「Громко」/ [gromkə] のカタカナ表記	
AN14RS07	グロームカ
被験者G	グロムカ

レポート内の記述
• ロシア語ではアクセントが大事で、この場合は最初の音節にアクセントがあるため、私は「ラン」の音節を長く発音する表記をした。 • アクセントは「グロ」の音節にあるので、私は「グロー」と書いた。「グロムカ」だけの場合、読む時にアクセントを「グー」に置く可能性があるため、「グーロムカ」という違う言葉になる。 • ロシア人としてアクセントを気にして表記してほしいと感じ（後略）

（H）MH13RS08（母語：ロシア語）の調査データとレポート内の記述

調査語彙「электричка」/ [ɪlʲɪkʼtrʲitɕkə]のカタカナ表記	
MH13RS08	エレクトリーチカ
被験者H1	イリフトリチカ
被験者H2	イリィティーチカ
レポート内の記述	
ロシア語は強弱アクセントであり、アクセントのある音は伸ばして強く発音し、アクセントのない母音が弱化されるが、それを表現するためにアクセントのある母音は長音符をつけた。	

３．１．２．２．レポートの分析

（D）、（E）、（F）から、韓国語において長音はかろうじて残っている程度であり、若い世代にはほとんど意識されなくなっていることがわかる。その意識の薄さは学生のカタカナ表記にも反映され、また、発音を聞かせる際にも、聞き取りやすいようにという配慮から日本語母語話者の２モーラの感覚に相当する長さで発音してしまうなどのケースもみられた。その結果、学生と日本語母語話者の表記が異なることとなった。韓国語を母語とする学生に対し、このレポート課題は長音の音素感覚に気づく効果をあげていると言えよう。

また、（G）、（H）からは、ロシア語を母語とする学生がアクセントとの関連において長音を意識していることがうかがえる。今回取り扱ったレポートの筆者のうち、ロシア語を母語とする学生は２人であったが、その２人ともが「そこにアクセントがある」という理由で長音を用いた表記をしている。確かにロシア語においてアクセントのある音節は他の音節に比べて長く発音されるが、その長さは日本語の２モーラの長さには満たず、その結果、（G）や（H）のようにカタカナ表記にずれが生じたのだと考えられる。このレポート課題は、言語による「長さ」に対する感覚のずれを浮かび上がらせる効果があると言えよう。

３．２．学習者の母語にあって日本語にないもの

ここまで「学習者の母語になくて日本語にあるもの」をみてきたが、ここからは反対に「学習者の母語にあって日本語にないもの」を取り扱っていく。

学生たちは、日本語母語話者が日本語にない音や音節をどのように表記するかをあらかじめ予測して調査にのぞんだ。結果は予想通りのものから、予想だにしなかったものまで様々であり、学生たちにとっては、日本語母語話者の音素感覚について考えることはもちろん、自分の実際の発音をあらためて意識する機会ともなった。

3．2．1．閉音節

日本語は基本的に開音節の言語であり、語末に/n/以外の子音が来ることはない。そのため閉音節の外来語は、母音を挿入し、開音節で発音する。挿入する母音はおおよそ決まっているが、「strike」を「ストライク」と「ストライキ」などと異なる母音を挿入し、異なる意味で使用する例や、「ink」という単語を同じ意味で「インク」と「インキ」の 2 通りで発音する例なども存在する。さらに、最近では、カタカナ表記全体の流れとして、より原音に近づけた「フェ」や「トゥ」などの表記もとられるようになり、一筋縄ではいかなくなっている。

3．2．1．1．レポートデータ

(I) PI13TH09（母語：タイ語）の調査データとレポート内の記述

調査語彙「เกษตรศาสตร์」/ /kase:dsa:d/ のカタカナ表記	
PI13TH09	ガセートサート
被験者I1	カセーサート
被験者I2	ガセーサール
被験者I3	ガセイサー
レポート内の記述	
一番間違ってるのは末子音だと分かりました。（中略）最後の音は日本人が聞き取れないようです。それは一般の日本語の単語は音節が母音で終わるものである。が、タイ語の場合は日本語と同じく母音で終わる音と、子音で終わるもの（末子音）である。したがって、タイ語がわからない日本人の耳にすると末子音が聞き取れないわけだ。	

(J) KF15CZ10（母語：チェコ語）の調査データとレポート内の記述

調査語彙「prst」のカタカナ表記	
KF15CZ10	プルスト
被験者J1	パラスッ
被験者J2	パルス
レポート内の記述	
• 被験者J1は「パルス」、つまり 3 モーラの単語として聞き取り、最後の子音「t」を聞き分けなかったと推理できるだろう。 • 被験者J2は「パラスッ」と表記し、最後に「ッ」を利用することにより、閉鎖音が生じるのではないかと感覚的に把握できた。	

(K) AN14RS07（母語：ロシア語）の調査データとレポート内の記述 2

調査語彙「Магнит」/ [magnit]のカタカナ表記	
AN14RS07	マグニート
被験者K1	マグニートゥ
被験者K2	マグニィート
レポート内の記述	
最後の「トゥ」は考察が難しい。外来語のルールによると、「ト」だけで十分だそうだが、もしかしたら自分の発音の「t」が少しだけ「ツ」に似てることにより「トゥ」と表記したのかもしれない。	

３．２．１．２．レポートの分析

（I）、（J）、（K）から、日本語母語話者の閉音節に対する不安定さがうかがえる。学生が分析したように語末の子音が聞き取れない被験者も多いが、その一方で、学生と表記が合致している被験者、「トゥ」という表記や語末に「ッ」を付加することで閉音節を表そうとする被験者も確かにいる。これは、閉音節という言葉は知らなくても、語末が子音のみの単語があり、音がある、ということが徐々に日本語母語話者にも意識されるようになってきているからではないだろうか。このレポート課題は、こういった日本人の音節構造の捉え方の揺れに接する効果もあげている。

３．２．２．有声阻害音の無声化

前後の音環境によって有声阻害音が無声音として発音される言語がある。学生は無意識下に置かれているであろう音変化をあらためて意識することとなった。

３．２．２．１．レポートデータ

（L）KT13BG11（母語：ブルガリア語）の調査データとレポート内の記述

調査語彙「красив」/ [kresif]のカタカナ表記	
KT13BG11	クラシブ・クラシヴ
被験者L1	クラッシッフ
被験者L2	クラシーブ
被験者L3	カッシフ
レポート内の記述	
被験者L1の「クラッシッフ」は子音も母音もブルガリア語の発音をよく表している。実は、ブルガリア語の言葉は濁音で終わる場合は、その濁音は普通その濁音に相当する清音として発音されている。	

（M）PT13PL12（母語：ポーランド語）の調査データとレポート内の記述

調査語彙「brąz」/ [brɔ̃s]のカタカナ表記	
PT13PL12	ブロンズ
被験者M1	ブロンス
被験者M2	ブロンス
被験者M3	ヴロンス
レポート内の記述	
語末子音の無声化は、ポーランド人である私には音声に限った現象で、カタカナで単語を表す時には有声音で書くのに対し、音声しか分からなかった日本人は無声化を正確に表した。	

３．２．２．２．レポート分析

（L）、（M）から有声阻害音の無声化が、ある程度無意識化されていることがうかがえる。学生は文字を基準にカタカナ表記を考える傾向にあり、こういった綴りに現れていない、習慣化された音韻変化が反映されないことがある。音声情報のみの日本語母語話者が書いたカタカナ表記を通じ、そのことをあらためて発見する。このレポート課題は母語の音韻変化を再確認す

る効果があると言えよう。

3．2．3．1．パッチム

韓国語では、CVCのような閉音節をつくることが可能であり、そのような音韻構造における最後のCにあたる字母をパッチムと呼ぶ。パッチムはこのレポート課題において大きく2つの事柄に関わってくる。

一つは「閉音節」であり、3.2.1.で述べたように、聞き取れたり聞き取れなかったり、聞き取れた場合でも表記にばらつきが生じるなどの音節構造の捉え方の揺れを知る効果をあげる。

二つ目は「連音化」である。韓国語における連音化とは、パッチムの直後に無音の子音「ㅇ」がきた際、パッチムの音と「ㅇ」についている母音とが組み合わさって発音される現象のことである。この節では主にこの「連音化」について取り扱いたい。

3．2．3．1．レポートデータ

（N）KM13KR05（母語：韓国語）の調査データとレポート内の記述2

調査語彙「천안」/ cheonanのカタカナ表記	
KM13KR05	チョンアン
被験者N	チョナン
レポート内の記述	
•（前略）「천안」の場合、実際は全部「パッチム」を持つに文字でできている音で、「チョンアン」とはっきり発音するべきだが、韓国語の発音でよく見られる「連音化」のせいで、「チョナン」と聞こえたらしい。 • 韓国人はルール（*連音化規則）に従って発音している訳ではなく、スムーズに発音するために連音化が自然に行われている。 •「チョナン」だと「처난」の表記に近い。	

（O）CH14KR03（母語：韓国語）の調査データとレポート内の記述2

調査語彙「고양이」/ GOYANIのカタカナ表記	
CH14KR03	ゴヤンイ
被験者O1	ゴヤニ
被験者O2	ホヤンギ
レポート内の記述	
私（韓国語母語話者）の場合、韓国語にはパッチムがあることを既に知っているので、日本語に移す場合にもなんとかして、このパッチムの発音を生かしたいと思っていた。고[go]と야[ya]までは被験者O1と同じであるが、パッチム「-ㅇ(/N/)」のところに違いがあり、その影響で、最後のところが이[i]と니[ni]で表れると思われる。被験者O1の発音をできれば韓国語の発音に近くうつしたら同じく「goyani」になるが、切れ目が全く違う。私の場合は「go/yan/i」であるが、被験者O1は「go/ya/ni」になる。	

3．2．3．2．レポート分析

（N）、（O）から、パッチムを含めた文字の影響の強さがうかがえる。連音化の知識は持っており、そのように聞こえることは理解できるが、発音はあくまで文字ベースであり、連音化し

た表記とは違ったものである、という意識が見られる。このレポート課題を通して、音節単位の表記体系とモーラ単位の表記体系の相違によって音素把握の枠組みの違いを理解する効果が期待できると考える。

4. おわりに

「音素」については、Chomsky and Halle（1968）[4] などの生成音韻論の枠組みでは、それを「単位」として認めないとする考え方が示されている。理論的な枠組み内で設定される単位（例えば、「弁別素性」）を否定するものではないが、言語学の初学者にとって、「多少の訓練」で「析出」できる単位として（cf.宮岡（前掲））、「音素」に着目することには意味があると考える。

関連して、本稿が対象としたレポート課題を課す主たる目的は2.2.で述べたが、調査項目の選定、（厳格に定められた方法による）調査、結果の分析という、この分野における研究手法（の骨格）を体験することは、「入門」の授業として必要な訓練になるとのねらいもある。本稿の範囲を逸脱するが、2回目、3回目のレポートでは、確実にこの点を身につけていることが分かるレポートとなっていくことを付記しておく。

注

1）本授業については、岩井（2001）「日本語上級者に対する音声学・音韻論教育の試み　－『日本語学1（音声・音韻）』を担当して」『留学生日本語教育センターにおける教育活動』大阪外国語大学留学生日本語教育センター編集pp.133-155で、その当時の授業の詳細について報告している。内容には異同があるが、授業のレベルについては、拙稿（上掲）を参照されたい。

2）メールアドレス、ファイル名を伏せ字にしたほか、本稿に採録するにあたって字送りなど一部改変した。下線・太字による強調は原文のままである。

3）宮岡伯人（2015）『「語」とは何か・再考―日本語文法と「文字の陥穽（おとしあな）」』三省堂

4）Chomsky, Noam and Morris Halle（1968）*The Sound Pattern of English*. New York: Harper & Row.

謝辞

本研究は、科研費26370449の助成を受けたものです。

（まつぎ　なるお　本センターティーチング・アシスタント）

（いわい　やすお　本センター教授）